

神戸大学医学部附属病院 消化器内科

基礎研究の強化と
幅広い知識を有する専門医の育成が
高度な内視鏡治療を支える

臨床、教育、研究を柱に
消化器内視鏡診療の質的向上に努める

国立大学附属病院は医療の専門化・高度化への対応が求められ、医学系人材養成などの臨床教育の場でもありますが、神戸大学医学部附属病院・消化器内科でも臨床、教育、研究の3つをバランスよく実践することを目的としています。本年4月には、同大学院医学系研究科組織の見直しに伴って大学内のスタッフを結集し、消化器内科分野として新たなスタートを迎えることになりました。約40名の陣容を率いる東健教授から、現状の取り組みや今後の展望などを伺いました。

同科では消化器全般の診断と治療を行っています。内視鏡検査件数、治療件数は全国の国立病院でもトップクラスの実績を誇ります。中でもESD(内視鏡的粘膜下層剥離術)は年間200例近く施行しており、さらに平成19年度には院外の拠点病院にも症例を拡大し、院内と合わせて合計500例の施行を見込んでいます。消化器内科教授 東健先生
また、同院では膵癌や肝臓移植などの難しい外科的治療も積極的に行っていますが、その手術を支える高度な胆膵系内視鏡検査と処置を消化器内科が一手に担うなど、消化器疾患全般における高度な診断と内視鏡治療を実践しています。

新体制のスタートにあたり、教育においても高度な技術と経験を有する陣容を確保し、医学生や研修医に対しては消化器内科医としてのゼネラルな知識と技術を習得できる教育を実践するほか、より多くの消化器内視鏡専門医を育成して兵庫県下の各医療機関に輩出する役割も担っています。また同科では、ヘリコバクターピロリ感染症と癌がんの関連性や炎症性腸疾患(IBD)の病態解明のための腸管免疫の研究など、臨床に役立てることを目的とした基礎研究にも力を入れています。臨床医学系のみならず基礎医学系の学会への論文投稿なども視野に入れた幅広い研究活動を行っていきたくと考えています。



消化器内科教授 東健先生



神戸市中央区楠町7丁目5-2
病院長：春日雅人 病床数：920床
【内視鏡検査・治療実績(平成18年度)】
内視鏡検査数：6,670件(うち上部 4,304件、下部 1,758件、
ERCP 393件、EUS 215件、含ESD 168件)
【スタッフ数】医師33名、看護師・光学技師7名(うち内視鏡技師3名)

神戸消化器内視鏡機器・ 開発教育センター(KEDDEC)を開設

平成18年2月、神戸市が推進する医療産業都市構想の一貫として「神戸医療機器開発センター」が開設されました。同年10月には、消化器内視鏡に関する機器開発と教育・実技トレーニング事業を展開するため、東先生が中心となり同センター内に「神戸大学・神戸消化器内視鏡機器・開発教育センター(略称:KEDDEC)」が設立されました。機器開発事業では、より安全で効果的な診断・治療を可能にする新しい製品開発を目指し、ESD用のナイフや胆管ステント等の処置具のほか、MR内視鏡の開発にも既に取り組んでいます。東教授は、「MR内視鏡が実現すればより高度な診断が実現するほか、癌の深達度や病変周囲の血管走行が術前に同定できるので治療戦略の策定にも有用です。それにより、手技時間の短縮や出血のリスク軽減が実現し、患者さんに対してより安全で確実な治療が行えると考えます」と説明されました。また、主にESDをテーマにした年5回ほどの定期的なセミナー開催や、生体豚を用いた内視鏡実技トレーニング方法の確立など、KEDDECにおける研修・教育の充実も計画されています。

臨床・教育・研究のそれぞれの質を高めながら、各分野が他の成長を促すような現場体制が整ったことで、消化器内視鏡診療における同科の更なる発展と地域への貢献が期待されます。



消化器内科のみなさん